

くノ一桔梗

乳房蟲責め地獄物語

……季節外れの寒気が村々を襲い、農民たちが丹精込めて育ててきた作物の多くは実りを前に枯れてしまった。落胆に肩を落とす彼らに追い打ちをかけたのは領主の冷酷な仕打ちだった。ほんのわずかに採れた収穫物を税として納めろというのだ。農民たちが絶望したのはいうまでもない。

「これを取られたら生きて冬を越せない！ 生きていけない！」

悲痛な声で訴える農民たちに対して、領主は傾聴ではなく暴力でもって報いた。村の主だった者たちを捕らえると、彼らに拷問を加えたのである。

鉄の棒でしこたま殴られ、全身の骨という骨を砕かれて生きたまま陸の海月にされた者、手指の爪を全て剥がされ、その手で芋掘りを命じられた者、足の踵に五寸釘を打ちこまれた末、その足で走ることを命じられた者など、領主に連れて行かれた者たちは、誰も彼もが悲惨な運命を辿る羽目になった。

悲嘆に暮れる農民たちをさらなる絶望に追い込んだのは、領主の追加の仕打ちだった。領主は、税を納められなかった彼らに対して、妻や娘を売るよう命じてきたのである。その命令には「従わぬ者は一家全員死罪に処す」という命文まで加えられていたのだ。

農民たちがした選択は様々だった。

泣く泣く妻や娘を売る者もいれば、家と土地を捨てて領外へと逃

げ出す者、一家心中を遂げる者などがいる一方で、領主の過酷なまでの仕打ちに憤り、反感を覚え、反発する者が少なからずいた。彼らは密に集い、相談して、領主に一矢報いるための決断を下す。金を出し合って暗殺者を雇ったのだ。

農民たちに雇われた暗殺者はくノ一で、名を桔梗といった。容姿が大変美しい娘で、また女性の象徴的部位である乳房が牛のように大きかったが、彼女がソレら「女」としての性を武器にしたことはなく、毒を仕込んだ暗器で標的を仕留めることを得意としていた。

領主の暗殺を懇願された桔梗は、農民たちの代表を前に、大きな胸を張って力強く断言したものである。

「領主の横暴、決して許すまじっ！ 必ずや討ち取って、皆様方に吉報をお持ちいたしましょう！」

一夜、領主が住まう城に忍び込んだ桔梗は、就寝中だった領主を見つけると、天井から毒を塗った吹き矢を放ち、見事ソレを領主に命中させた。

「ぐあああああああッ！」

布団の上でのたうち回る領主。毒矢が撃ち込まれた部位を紫色に変色させながら口から泡を吹き、目を剥いて身体を痙攣させている。しかし、身体が強靱だったのか、それとも毒に対するわずかな耐性があったのか、なかなか死ぬ気配がない。そのため、桔梗は領主にトドメを刺すべく、天井から舞い降りた。

が、その時だった。

「曲者が姿を現したぞ！」

声が響くと同時に、待ち構えていたと言わんばかりの勢いで、部屋の外に控えていた兵たちが一斉に姿を現したではないか。

「し、しまったッ！」

桔梗は下りたことを後悔したが遅かった。囲まれ、無数の槍を突きつけられたとあっては、逃げることは不可能に近い。彼女は捕まってしまうた。

桔梗が驚いたのはその直後だった。捕らわれた彼女の目の前に、なんと、無傷の領主が現れたではないか。顔に愉悦の笑みが浮かんでいる。

「な、なぜ——ッ!?」

驚く桔梗に対して、領主は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「馬鹿め。アレは影武者だ。おまえたちの浅はかな計画など、全てお見通しよ」

領主暗殺計画は、事前に漏れてしまっていた。計画を練った者たちが漏らしたからではない。偶然にもソレを知った者が、保身と褒美のため、領主に事の次第を報告したからである。

かくして捕らわれの身となった桔梗は牢獄へと繋がれた。そしてそこで、身につけていた着物を全て剥ぎ取られて全裸にされると、尋問という名の拷問を受けることになった。

「さあ吐けッ! こんな企てをしたのはどこのどいつだ! さっさと吐きやがれッ!」

拷問吏は桔梗の身体を容赦なく責め立てた。それも、特定の部位をだ。桔梗の大きな乳房がその標的とされた。

「吐けッ、吐けッ、吐きやがれッ!」

そう咆え立てながら、拷問吏は桔梗の乳房を鞭で殴りつけ、焼けた火箸でもって貫いた。それだけでは済まない。ペンチで乳首を抓ったり、蜜を塗って虫を集らせたり、蠟燭を垂らしたりもした。荒縄で乳房の根元を縛り上げて天井から吊るしたり、傷口に塩を塗り込んだり、さらには彼女を精神的に追い詰めるべく、醜悪な囚人を

連れてきて、桔梗の大きな乳房に膿んだ男性器を擦りつけさせ、射精するという行為までもおこなったりもしたのだ。

「ううっ、ぐう……っ！」

乳房を容赦なく責め立てられるつど、桔梗は顔を苦悶で歪めたが、それでも彼女は決して依頼主たちのことを話そうとはしなかった。捕まったのは自分の責任であり、失敗である。忍び者としての矜持と自尊心が、過酷ともいふべき拷問を耐えさせていたのだ。

乳房責めが始まって一〇日あまりが経過した。乳房が無残にも、傷だらけのポロポロになっても、桔梗はいまだ何も話す気配がなかった。業を煮やした拷問吏が、桔梗の乳房を思いつき掴んだ。指が、乳房の奥深くめり込むほど力強くだ。

「おい、おまえ！ 早くしゃべらないか！ さもないと、この無駄にデカイ胸が腐り落ちるぞ！」

問いながら、乳房を握る腕にさらなる力を込める。ぎゅううううううっ、と指が食い込んで、桔梗の大きな乳房が柔らかに形を変形させた。

「ぐ、ぐうう……」

桔梗は乳房を掴まれたことで苦悶の表情を浮かべたが、その痛み慣れると、表情を苦悶から不敵へと転じ、拷問吏の顔に唾を吐いて傲然と言い放った。

「……ふ、ふふん。それならそれで、いっこうにかまわん。もともとから思っていたのだ。大きな乳など邪魔なだけだ、とな。いい機会だ。これを機に、切り落としてしまえばそれで終いだ……」

「な、なんだと、この……！」

憤激した拷問吏が、桔梗の乳房に更なる追撃を加えようとしたその時だった。

「なるほど、なるほど。でかい乳など要らぬと申すか」

暗い声が響いて、無数の視線が声がした方向に向いた。

声の主を見て、桔梗がギリツと歯を噛みしめた。

「領主……」

現れたのは領主だった。大きな壺を持った従者をふたり引き連れて、自らも腕に小さな壺を抱えている。彼は、顔に邪悪な笑みを浮かべながら、身柄を拘束され、乳房を強調された状態できつく縛られている桔梗に近づいた。そして、度重なる拷問に晒されながらも、いまだ強い色香を漂わせている桔梗の大きな乳房を手でワシ掴むと、指先でこりこりと乳首を弄りながら言葉をつづけた。

「こんな立派な乳をもっているのに、おまえはコレが要らぬと申すのか。世の女どもは自分の胸が小さいと嘆いているのに……勿体ないと思わんか？ ん？」

嘆かわしげに言いながら、領主は乳房に顔を近づけ、桔梗の乳頭を口に含んだ。唾液に濡れた舌先が乳首を舐めまわし、傷口に染み渡る。

桔梗は不敵に顔を歪め、疼くような痛みを堪えながら、夢中で自らの乳房を舐めしやぶる領主を笑ってみせた。

「領主よ、おまえはわたしの乳房に見惚れたか？ そんな子どものようにしゃぶって……いいぞ、欲しければくれてやるぞ。元々でかいだけで無用の長物と置いていた代物だからな。さあ、切り取って持ってゆくがいいッ！」

それが強弁であるか否かは別にして、その発言は相応の覚悟をもって放った言葉であることは疑いようがなかった。ゆえにこの場で両方の乳房を根元から切り落とされたとしても、桔梗は悲鳴ひとつあげぬに違いない。

領主が舐めしゃぶっていた乳房から口を離した。乳首の先がぬらぬらと唾液で濡れており、その一部が、雫となって乳頭の先端からぽたつと垂れ落ちた。

「そうか、そうか。おまえはこの乳を我にくれると申すか……」
じゅるり、と舌を舐めまわして言いながら、領主が嗤った。それは背筋がゾツとするような悪意に満ちた嗤い方であり、桔梗の首筋に若干の悪寒が走った。

「あ、ああ……く、くれてやるともツ！　こんな乳、でかいだけで無用の長物だからな！　さあ、早く切り取って持っていくがいいツ！」

半ば絶叫するように桔梗は叫んだ。手足の先が、ほんのわずかに震えているのは、懸命に恐怖に耐えている証かもしれない。

領主が、また嗤った。

「そうか、そうか。では、いただくとしよう。いまからこの乳は、私のモノだ」

そう言って、領主は桔梗の乳房から手を離すと、そのままその手で大事そうに抱えていた壺の蓋を取った。そして、その中身を、桔梗に見せつけたのである。

「なっ、ひい——ツツツ！」

桔梗の顔が一瞬で恐怖で染まった。壺の中に蠢いていたモノを見て、戦慄に捕らわれたからだ。彼女は壺の中で蠢くソレに、見覚えがあった。

「そ、それは乳線蟲！　な、なんでそんなモノを、おおおまえが——ツツツ！」

乳線蟲とは、ハリガネ虫の一種で、人畜の雌の乳房に巣くう寄生虫である。一匹の長さは一寸（約三〇センチメートル）ほどで、忍

び者が女性に対する拷問に使用することでも知られており、桔梗は過去に何度か、乳線蟲による拷問を受けた女性の姿を目にしたことがあった。

乳房に乳線蟲を寄生させられた女性は、その痛みと痒さに狂ったように悶え苦しみ、自らの手で乳房を掻き毟り、あるいは乳房内で蠢く乳線蟲を潰そうと揉みしだくが、一度でも乳線蟲に寄生されてしまったが最後、乳房を寄生虫の巣にされて、生きている限り幾度となく乳線蟲の幼蟲を大量に産み落とすことになるのだ。そして挙句の果てには狂い死ぬのである。その最後と云ったら、この世に数多ある死に方の中でもっとも酷い死に方だと言われていた。

「くくくく……なかなか苦勞したのだぞ、これを手に入れるのは。そして、増やすのには、もっと苦勞したものだ。くくくくく……」

そう言いながら、領主が壺の中で蠢く乳線蟲を一匹、指で抓んで取り出すと、ソレをぐいと桔梗の顔に近づけた。ぐにぐに、ぐねぐねと、おぞましく動くソレを見て、桔梗の顔が戦慄の恐怖で青く染まった。

「ひ、ひいッ、ち、近づけるなッ！ ひいひいひい……ッッ！」

これまで乳房に幾度となく過酷な拷問を受けた彼女が、乳線蟲を一匹近づけただけでこの怯えっぷりである。まるで初めて男性器を見せつけられた童女のような表情で、顔を背け、本能的に忌避行動を取ろうとする。この蟲を使った拷問が、いかに悲惨で、そして凄惨であるか、彼女のこの醜態を目の当たりにすれば理解できるだろう。

そんな桔梗の態度を見て、領主が愉しそうな声で笑った。

「くくくくく。おまえは嫌いか、この蟲が？」

「あ、ああッ！ 好きにするがいいッ！ たとえこの乳房を蟲の巢にされたとしても、わたしは絶対におまえに屈しないッ！」

領主がニタリと嗤った。

「そうか。では、遠慮なく」

そう言って、抓んでいた乳線蟲の一匹を、桔梗の右乳房に近づけた。

………続きは本編でお愉しみください。